

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18464

研究課題名（和文）アート協働制作による社会関係資本形成の社会的・実践的研究

研究課題名（英文）The sociological and practical research of creating social capital by engaging arts

研究代表者

高橋 かわり（TAKAHASHI, Kaori）

立教大学・社会情報教育研究センター・助教

研究者番号：30733787

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、芸術を通じた活動、とりわけある地域で様々な人が関わって行われるアート協働制作がどのように行われるのか、そしてその過程でどのような関係性（社会関係資本）が醸成されるのかということについて、フィールドワークをもとにした探求を行った。対象事例とした事例には様々なアクターが関わっており、その芸術活動（対象者・ジャンル・実施主体）が選ばれる過程にはそれぞれの地域の文脈があることが分かった。そのうえで、アートが多様な人々に開かれているといわれる理由は、その協働制作の場において様々な配慮がなされていることがその一因にあるといえる。これがいわゆる橋渡し型社会関係資本の考えと結びつくのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、ある地域で複数年継続しながら、その活動形態を変化させてきている芸術活動の事例調査をすることで、協働制作の場での相互行為のみならず、その相互行為を成り立たせる制度的背景や、地域とのかかわりを明らかにした。そして芸術やアートの協働制作が人々のつながりを社会関係資本ととらえ、それを生み出すメカニズムとその手法について明らかにした。本研究の成果は、地域の関係性を社会関係資本という概念から捉える視座のみならず、それに基づく分析と、その時に取りうる学術的・実践的調査方法を提示している。このことは、今後同様の地域における芸術活動を調べる際の指針となりえ、実践者・研究者両方に影響を及ぼすだろう。

研究成果の概要（英文）：This research investigates the field of artistic creation held by various people by fieldwork. Through the process of creation, we find tips to include people from different backgrounds and to make them engage in art activities. The fields we research have different reasons and stories to engaging art activities in the communities. By engaging arts in the community, they can not only make new relationships but also notice the importance of attention for others. These considerations in the area make bridging social capital.

研究分野：芸術社会学

キーワード：アートプロジェクト 芸術 協働 社会関係資本 コミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

日本では1990年代頃からアートプロジェクトと呼ばれる地域やコミュニティを対象とした芸術活動の萌芽が見られ、2000年代以降各地で広まっていった。これらの活動は、芸術活動を通じた地域内外の関係性構築をひとつの目標としていた。

このアートプロジェクトの効用を説明する際、社会関係資本という言葉がしばしば用いられていた。しかし、勝村ら(2008)による定量的調査や、行政による評価調査がわずかにあるだけで、十分な調査に基づいて議論されている状況ではない。確かに芸術祭を対象に「定性的」かつ「客観的」に社会関係資本の構築や蓄積を記録した吉田隆之(2015、2019)の研究がある。しかし、吉田の研究では現場の出来事の記述に留まり「定性的」根拠としては不十分な考察が散見され、「客観的」と呼べるほど社会科学的に十分に議論されているとはいえない。

曖昧なまま論じられているアートプロジェクトにおける関係性構築について、社会科学の方法に基づく研究・分析を展開することは、その調査方法の共有とともに、喫緊の課題である。同時に、この課題の解決は公的資金に基づくアートプロジェクトの多くが成果とその評価軸の提示を求められている現状において、実践的にも価値を持つ。

## 2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は、アートプロジェクトの中で展開されている実践の中でも、社会と関わる芸術(socially engaged art)における社会関係資本構築について、ミクロ・メソ・マクロの観点から学術的ならびに実践的に調査研究することを目的とする。ここで用いる社会関係資本(social capital)は、ロバート・パットナムが『孤独なボウリング』(2000=2006)で用いた「社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範(p14)」という定義を用いる。本研究の関心に従えば、個々人が何かしらの関係性を持つことで生じる、おたがいに協力しあう実践と相互の信頼が、とりわけ芸術活動においてどのように醸成されるのか、具体的な芸術実践を調査することで明らかにする。

調査分析過程においては、芸術実践の現場(アート協働実践)におけるミクロな相互作用のみならず、ある地域全体を俯瞰してとらえるマクロレベルでの変化や、その地域内の団体等の諸関係の整理といったメソレベルでの相互関係を合わせて考える。

## 3. 研究の方法

本研究では、萌芽期にあるアートプロジェクトを2つ取り上げ、その発展過程に着目した。具体的には、A.愛知県名古屋市港区(港まちづくり協議会の諸活動ならびにアッセンブリッジナゴヤ)と、B.大阪府大阪市西成区(Breaker Project)の2つの地区において展開されている芸術実践をそれぞれ取り上げ、調査を行った。調査手法としては、フィールドワークを主たるものとした。両地区とも2~3ヶ月に1度、当該プロジェクトへの参与観察を行いつつ、関係者へのインタビューを複数実施した。さらに、補助的に行政データや既存のアンケート調査を併用しつつ、一部質問紙調査を行った。研究目的にあげた本研究の視座と対照させれば、参与観察はミクロレベル、インタビューはメソレベル、質問紙調査や既存のアンケートの分析はマクロレベルのそれぞれを射程に入れた調査であった。

Aの事例は、主に高橋かおりが調査を担当し、パットナムら(2003)が行った物語的記述に基づく調査を参考にしつつフィールドワークを行い、調査対象団体が実施した来場者アンケート結果をもとに、参加者の全体像を把握した。

Bの事例は、主に竹田恵子が調査を担当し、プロジェクトの実践における参与観察を実施しながらも、勝村ら(2008)の研究を引き継ぐ質問紙調査を地域全体において実践した。

## 4. 研究成果

(1)愛知県名古屋市港区(港まちづくり協議会の諸活動ならびにアッセンブリッジナゴヤ)での調査 現代美術と音楽の実践

### 概要

調査対象団体である港まちづくり協議会は、愛知県名古屋市港区を拠点に2006年に設立されたまちづくり団体である。本調査では港まちづくり協議会の活動の中でも、芸術分野に特化したプロジェクト「Minatomachi Art Table, Nagoya(以下MATと表記)」が関わる活動を対象とする。MATは現代美術を中心として、港区内の空き家や各種施設を活用した活動を展開している。

このMATもかかわる芸術祭として、2016年より毎年秋に5か年の予定で「アッセンブリッジナゴヤ」が行われている。これは名古屋市のクラシック音楽部門の活動として計画されていたが、芸術祭のマネジメントの受け皿として港まちづくり協議会が選定され、現代音楽も含めた芸術祭として始動した。

開始当初はコンサートや展示など、外部で練習や制作が行われた作品を地域内で発表する企画が中心であったが、徐々に地域内での練習や制作へと活動の方向が変更されていった。その方針は2019年度により明確になった。美術はあえて大きな展示を行わず、各アーティストが作品準備段階を一般に公開しながら制作をする方式が取られ、音楽では公募による市民参加の弦楽アンサンブルや、地域に一定期間滞在するレジデントアーティストの企画が行われた。2020年度は最終年度としてひとつの区切りとなる活動を行う予定である。

## 調査結果

アッセンブリッジナゴヤの特徴は、各プログラムや活動ごとに異なった属性の人々が集まっていることにある。その特徴を来場者の傾向（マクロレベル）、運営面での工夫（メソレベル）、プログラムでの取り組み（ミクロレベル）から見ていきたい。

2017・2018年の来場者アンケートの結果からは、現代美術のプログラムには「地域外から来た若い男性」、クラシック音楽のプログラムでは「近隣地域に住む年配の女性」からの回答がそれぞれ多いことがわかる。さらに、現代美術とクラシック音楽をつなぐ企画として2018年から始まったサウンドブリッジのプログラムでは「遠方から来た若い女性」からの回答が多かった。このような属性を「近隣地域に住む年配の男性」という従来の街づくり団体の主体と比較すれば、それとは異なる人々をアッセンブリッジナゴヤが引き付けていることがわかる。

さらに分野ごとの違いは、現代美術・クラシック音楽で企画部門が独立していることの反映でもある。美術・音楽の各ディレクターならびに市役所担当者からの聞き取りから、プログラム企画はそれぞれの部門の視点から行われているということがうかがえた。ただしこれについても年を経るごとに運営面での連携は取るようになっており、芸術性は独立しつつも同じ芸術祭の枠内に入れることで、複数のターゲットに対して働きかけを行っている。

さらに、美術と音楽では一般参加者の巻き込み方が異なっている。美術部門は港まちづくり協議会の拠点場所を活かし、芸術祭期間外でも継続的に展示やイベントを行っている。また、各アーティストが発案した企画が住民の手に渡り、アーティストから離れて独自に展開し始めた事例もある。これは、芸術の形を変えることにより、その敷居を下げるアートプロジェクト的展開といえる。

他方、音楽部門は住民を鑑賞する側から演奏する側へといざなう企画が行われる一方、音楽そのものを身近に感じてもらうという活動が展開された。鑑賞機会の確保と演奏経験の提供は、アウトリーチに近い活動を展開しているといえる。

それぞれにアート協働という時のアプローチは異なるが、いずれの部門においても、芸術性の担保を重視している。両部門のディレクターはともに芸術専門教育を受けており、まちづくりを意識しつつ「質の高い芸術活動」への強いこだわりを見せていた。

## 調査考察

港まちづくり協議会ならびにアッセンブリッジナゴヤの諸活動は、複数の選択肢を用意することで包括的に芸術への入り口を用意していること、そしてその際に紹介する芸術の質を管理することによって、住民（を含む鑑賞者）と芸術家の出会いを提供している場だといえることができる。この意図は、企画者側が地域における芸術活動を美術館やコンサートホールでの活動へと連なるものとしてとらえ、芸術作品としての強度を持っていないと芸術の魅力を十分に理解してもらおうことが難しいと考えているからだといえる。

アッセンブリッジナゴヤにおける活動は、短期的には芸術に関心のある人だけが集まる結束型社会関係資本のみが構築されるように見える。しかし、参加者の属性や背景を詳細にみると、居住地、性別、年代などの社会的背景には多様性が見られ、継続のためには結束型の社会関係資本も構築しなければ難しい。

複数の芸術への入り口（かかわりしろ）を芸術祭が用意することは、点在する活動をつなぎ、連絡する可能性を持っている。そして、アッセンブリッジナゴヤの参加アーティストとマネジメントスタッフは、地域内外からの来場者や芸術祭には興味を持たない住民ともコミュニケーションをとり、地域における芸術活動の維持を試みている。

地域全体への浸透度は高いとはいえないが、大きなイベントに一度に大量の人を呼び寄せる短期企画型芸術祭ではなく、小さな活動を複数並走させて長期展開するプログラムにすることで、芸術に集う人が持つ結束型社会関係資本を、多様な人のつながりを重視する橋渡し型社会関係資本へと展開していく要素を持っているといえよう。

## （2）大阪府大阪市西成区（Breaker Project）での調査 現代美術とその外への実践概要

大阪市西成区「Breaker Project」は、インディペンデント・キュレーターの雨森信がディレクターとなり大阪市の文化事業（大阪市芸術文化アクションプランのなかの芸術まちづくり拠点事業）として2003年4月よりはじまった。

「地域密着型アートプロジェクト」として、「芸術と社会をつないでいくこと」を目的とし、「表現者と鑑賞者双方にとって有効な創造活動の現場をまちの中に開拓していく」という目的を持つ。さらに「芸術表現活動を私たちの生活に取り戻すことで、芸術・文化の裾野の拡大を図ると同時に、市民一人ひとりが多様な価値観を獲得し、それぞれの想像力、創造力を育み、成熟した市民社会が形成されていくこと」を目指している（公式ウェブサイトより）。

もともと新世界（浪速区）を拠点としており西成区山王・太子地区でもプロジェクトを行ってきた。現在でも複数の事業を並行して行っているが、調査者が注目したのははじまって比較的年数の浅い「作業場」（今宮地区）である。

「作業場」は2015年4月から旧・今宮小学校跡地で行われているプロジェクトであり、小学校に残る陶芸窯や倉庫、学習園など、あるものを活かし、アーティストと陶芸を行ったり、畑で野

菜を育てたり、廃材を利用して積み木や看板、ベンチをつくるなどの「作業」を通して、創造の場づくりを行うものである。きむらとしろうじんじんを中心としたアーティストほかに、空間デザイナーや造園のプロフェッショナルも招聘され、いわゆる美術作家と同等に活躍している。それぞれの技能を活かしながら、創造の場づくりに参画する。

作業場は通常月2回の週末2日(土・日曜)におよそ13時から16時半まで開催される。参加者の年齢層は下が未就学児、上が80代までおり幅広く、職業、ジェンダーにおいても多様であると見受けられた。参加者人数は1日30名~80名程度である。一般参加者が訪れる前後のミーティングにはアーティスト、事務局メンバー、常時参加するコアメンバーが各1日3時間、計6時間程度時間を割く。

### 調査結果

作業場での参与観察では、とりわけコミュニケーションの苦手な者に対して、どのように関係を継続するのかについて、作業を円滑にするための様々な工夫が見られた。

一例を挙げると、作業場ではルールを単にルールとして提示せず(たとえば「は禁止」と決める等) プロジェクトとして望ましくない行動をした参加者へのコミュニケーションの仕方が話し合われる。コミュニケーションは言語のみに限らず、看板を出す、態度で示すなど多面的な方向から考案され、単に「してはいけない/やめてください」という言葉以外でどのようにアプローチできるのかが話し合われるのである。

さらにここで、参加者の行動変容が目的化していないことも重要である。行動変容は望ましいことではあると認識されつつも、行動変容が十分でなくともその人と関係を続けていく志向性が強かった。また、問題と思われる行動をした者に対しての発言があった場合、相互行為場面においてその行動の理由まで遡り、いわゆる「他者の合理性」を想像しながら状況の再記述が行われているといった特徴が見られた。

そして、作業場での活動のみならず、その前後に行われる前後のミーティングにはアーティスト、事務局メンバー、常時参加するコアメンバーが各1日3時間、計6時間程度時間を割く。両日、ミーティングの後行きつけの店で晩御飯を食べるため、そのあとも話し合いが続く。このミーティングや打ち上げの席で延々と話し合われることが、参加者同士の配置、参加者との関わりについて情報の交換、戦略の取り方、合意形成に大きな役割を果たしていることが明らかになった。このミクロレベルの相互作用にはアーティストが大きな役割を果たしていた。

事務局メンバーへの聞き取りにおいては、まちのフィールドワーク、町内会への出席やチラシ配りを契機としたキーパーソンとの関係性構築によって、社会関係資本を蓄えながらプロジェクトを遂行している状況がうかがえた。キーパーソンの所属団体は町内会、地域の社会福祉法人、今池こどもの家、西成区社会福祉協議会等々である。団体責任者とともに、Breaker Projectに興味を持つという意味でのキーパーソンと関係をつくり参加者を紹介される傾向にあった。交渉する事務局メンバーやキーパーソン自身が持つ社会関係資本自体も大きく、それらが交差することによってより盤石な関係が築かれていた。

ここまでの参与観察とインタビューを通じて、Breaker Projectの活動を通じて橋渡し型社会関係資本が蓄積されているものと仮定し、質問紙調査を実施した。質問紙調査では、Breaker Projectを通じた関係性構築と、地域全体の関係性構築の差異を明らかにするため、参加者(Breaker Project会場での直接記入:回収数35)と非参加者(住民基本台帳からの無作為抽出・実施期間2020年3月・1000の配布に対して回答135)に分けて調査分析を行った。

具体的には、Breaker Projectへの参加/非参加、性別、年齢、学歴、文化資本スコア、他者への寛容さや信用度についてのスコア(市民醸成度)を独立変数に、社会関係資本スコアを従属変数にして重回帰分析を行った。

さらに、橋渡し型社会関係資本の指標については、先行研究(三隅2014)を参考に、関係基盤の多様性で測定を行った。具体的には、【1】交流する人々の多様性(社会関係資本スコア1)、【2】所属団体の数(社会関係資本スコア2)、【3】所属団体の構成員の属性(年齢、性別、職業、地域)の多様性(社会関係資本スコア3)で測定した。【1】と【3】はそれぞれ賛否4段階で回答してもらい数値化し、【2】については所属団体の個数をそのままスコアとした。

結果、3つの橋渡し型社会関係資本スコアのうち2つにおいて非参加者よりも参加者のほうが有意に高いことが明らかとなった。このほかにも3つの橋渡し型社会関係資本のうち2つにおいて文化資本量が大きいほど社会関係資本スコアも高くなる傾向にあった。

### 調査考察

Breaker Projectでは、ミクロレベルではアーティストが、メソレベルでは事務局が中心となりプロジェクト全体の社会関係資本の形成を促していた。ミクロ、メソレベルでは社会関係資本の形成におけるステークホルダーが異なっていた。ミクロレベルにおいては参加者の行動を変容させることを目的とせず、望ましい行動をしていなくとも「他者の合理性」を理解することにより状況を再記述し、関係を存続させることに主眼が置かれていた。こういった集団内での合意、戦略の取り方などは「作業場」開催前後の長時間におよぶミーティング、飲み会の席で話し合われていた。

メソレベルにおいては事務局メンバーが地域の各団責任者とともに各団体でBreaker Projectに興味を持つ者という意味でのキーパーソンと関係を築くことにより参加者の紹介を受けるな

ど社会関係資本の蓄積を行っていることがわかった。団体は地域に関係するという点では共通していたが、行政に限らず属性は多様であった。

マクロレベルではミクロ、メソレベルの調査結果より、橋渡し型社会関係資本に着目し、質問紙調査を行った。

アートプロジェクトや社会と関わる芸術においては、住民や参加者主導であることがしばしば賞賛され、アーティストの自律性が否定される。また通常 NPO や行政主導で住民やアーティスト、観客を結びつけると論じられる（吉田 2015）。しかし Breaker Project においてはアーティスト自らが中心となって社会関係資本を築く場面も多い。アーティストにはアートの既存の「芸術性」とそのものだけでなく、関係性自身の構築も含めてアートであるという志向があった。

この理由としては Breaker Project に中心的に参加するアーティストやディレクターが 90 年代京都市左京区におけるエイズをめぐる芸術 / 社会運動に関わっていた経験があり、日本においてアートプロジェクトが主流化する前から社会と関わる芸術なるものを実践していたことが要因として考えられよう。

作業場は 2015 年に始まったばかりのプロジェクトであるため、今後住民や参加者主導になっていく可能性も大きい。また参加者の「自発性」においてはまた別のレベルでみられることも確認できた。今後は参加者のやりたいことを事務局がすくい取る形でプロジェクトの細部は柔軟に変化していき、プロジェクトの主導者の変化も期待できる。

#### （４）本研究の総括

これまでのアートプロジェクト研究は、「なぜ地域で行うのか」ということは問われてきたが、「なぜそれが芸術なのか」ということは自明視されたままであった（高橋 2018）。本研究は、複数回の聞き取り調査や質問紙調査、アンケート調査の活用を通じて、関係性構築が行われる芸術活動の展開過程にある「芸術へのこだわり」を見出した。

名古屋市港区の事例と大阪府西成区の事例は、地域におけるアート協働制作の中でも、芸術性に重きを置いている活動だった。港区の事例では、美術・音楽各部門のディレクターがプログラムの質を意識したり、事後の批評を残したりする試みをしており、美術館やコンサートホールでの芸術活動と切り離さないように心がけていた。西成区の事例は一見芸術性がわかりにくい活動であるが、コミュニケーションの維持と円滑化の中に美的価値を見出しているという点で、芸術を志向していた。既存の芸術活動の拡張と、既存の芸術概念の書き換えと、その方向性は異なるものの、両活動は、地域における芸術実践において、それが芸術である意味が企画者たちに強く意識されていることが分かった。地域や住民、参加者に迎合することなく、芸術に関わってきたからこそできることを精緻化させる試みであった。

アーティストやマネジメントスタッフたちは、芸術活動で行われている実践が地域社会において応用できるという期待のみならず、地域における芸術活動が既存の芸術活動の基準や意識を変化させる可能性を感じていた。芸術へのこだわりがあるからこそ、アート協働実践が地域におけるほかの活動と差異化され、一定の人々を引き付けているのである。

芸術活動における関係性構築は、芸術というトピックに共鳴して集まるという点で、結束的社会関係資本に支えられている。しかし、その活動を継続させるためにはむしろ積極的に橋渡し型社会関係資本を重視する必要がある。このアート協働実践は、コミュニケーションの工夫や挑戦を通じて、新たな橋渡し型社会関係資本の構築の方法を提案しているのである。

#### 【参考文献】

- 勝村（松本）文子ほか、2008「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因 大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として」『文化経済学』6（1）；65-77。
- 三隅一人、2014「ソーシャル・キャピタルと市民社会」辻竜平；佐藤嘉倫（編）『ソーシャル・キャピタルと格差社会 幸福の計量社会学』東京大学出版会；35-51。
- Putnam, Robert D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster.（柴内康文訳、2006、『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。）
- Robert D. Putnam and Lewis M. Feldstein, 2003, *Better Together: Restoring the American Community*, New York: Simon & Schuster.
- 高橋かおり、2018「社会と関わる芸術にとっての地域 対立から包摂へ」『新社会学研究』3:123-144.
- 吉田隆之、2015『トリエンナーレはなにをめざすのか 都市型芸術祭の意義の展望』水曜社。
- 吉田隆之、2019『芸術祭と地域づくり “祭り”の受容から自発・協働による固有資産化へ』水曜社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋かおり	4. 巻 3
2. 論文標題 社会と関わる芸術にとっての地域 対立から包摂へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『新社会学研究』	6. 最初と最後の頁 123-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kaori TAKAHASHI
2. 発表標題 Building Social Capital in a Port Town Neighborhood with Contemporary Art Projects and Classical Music Concerts.
3. 学会等名 14th Conference of the European Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaori Takahashi
2. 発表標題 The Difficulties of Artists Under Tokyo 's Cultural Policy for the Year 2020: The Subsidization of Socially Engaged Arts
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kaori Takahashi
2. 発表標題 Defining "professional artists" within the realm of cultural policy: The vague boundary between professionals and amateurs in Japan
3. 学会等名 10th International Conference for Cultural Policy Research (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋かおり
2. 発表標題 アートの現場を調査する倫理と方法 対象者との関係を作る・はかる
3. 学会等名 第12回文化政策学会九州大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田中東子編、竹田恵子他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 『ガールズ・メディア・スタディーズ』（「ジェンダー・トラブル・イン・アートワールド」（竹田恵子））	

1. 著者名 竹田恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 『生きられる「アート」 パフォーミング・アート《S/N》とアイデンティティ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	北田 暁大  (KITADA Akihiro)  (10313066)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授   (12601)	

## 6. 研究組織(つづき)

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	韓 東賢 (HAN Tong-hyon) (50635670)	日本映画大学・映画学部・准教授  (32726)	2017年度のみ
研究分担者	神野 真吾 (JINNO Shingo) (90431733)	千葉大学・教育学部・准教授  (12501)	
研究分担者	竹田 恵子 (TAKEDA Keiko) (30726899)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・特任准教授  (12601)	2019年度のみ